只見短歌会　九月詠草

大塚栄一　指導

朝方の夢に出で来し逝きし娘（こ）の笑み居し顔に目覚め惜しみぬ　馬場　八智

深き谷下りつつ見ゆる紅葉の向ひの山は夕日に輝く　小倉キミ子

黄金ならぬうす桃色に休耕の田の面色どるみぞそばの花　目黒　富子

久に逢ふ五人姉妹弟（きょうだい）一人亡く八十五才のわれを囲みて　渡部ゆき子

老いし母我がガラケーにタップする母さんそれはスマホでやるの　新国由紀子

敬老会に招かれ行きて有り難きふだん会われぬ人の懐かし　関谷登美子

日曜日今日は無いのと夫は言ひ朝のドラマのチャンネル回す　渡部ヨリ子

二の孫の結婚式にはめむかとわれには過ぎし指輪買ひしが　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十月例会

目黒十一　指導

あの山路行きたし見たし実むらさき　弘子

夕暮れを少しおくらせ穂田の色　礼

どっかりと土にかまえる種茄子　一穂

稔り田の今コンバイン音あげて　修一

初芋の洗いし後の白さかな　味代子

熊へ備え鈴鳴らしつつ栗拾い　吉児

満山をひねもす奏で夕紅葉　幸生

獣道紅葉の中を抜けにけり　信

肌を刺す風にせかされだいこん引き　都

秋時雨落ち武者どもが峠越え

畦ごとに種類数えて大根蒔く

虫かごを置えて無心に少年の目

蜂の巣の軒に三ヶ所やりすごす

忌ごもりの吾も行く道秋の風

血に染みし戸の口原の草もみじ

階前の庭に音して桐一葉